

山尾城跡

はじめに
蕪城感慨

感懐幾度問荒丘。 雉堞縦空樵巡幽。 唯有村前一川水。 添緩永向海東流。

感懐、幾度か荒丘を問う。雉堞、縦空しく樵巡幽なり。唯だ村前、一川の水有り。
□緩（せんかん）、永く海東に向かって流る。（□はせん：マにガンダレと弄）
○蕪城 荒廃した城 友部の山尾城をさす。 ○雉堞 城の姫垣
○一川 十王川

「思いに駆られて、幾度この荒れてしまった城跡の丘を訪れたろう。かつての城の姫垣の跡も空しく、きこりの通う小道がひっそりと通っている。村前の川だけが、さらさらとなお東の海に向かって流れ続けている。」これは、江戸時代中期に活躍した「松岡七友」の長老格であった鈴木玄淳が山尾城跡を詠ったものである。玄淳は、その祖が山尾城主の家臣であったことから、その当時既に荒れ果てた山尾城跡への感慨が深かったのであろうか。

山尾城跡の位置

日立市十王町友部600番地の日立市立十王中学校の敷地が山尾城跡である。山尾城は、眼下に友部の宿並を見下ろすかのように、小高い丘の上に位置している。

多賀山地中の標高386.3mの石尊山から続く洪積台地は東に行くに従いその高度を下げる。この台地は、東流する河川による浸食を受け、東端部では手を広げたような形の独立丘陵状を呈することになる。山尾城跡が占地するのは、この独立丘陵の先端であり、その（付け根に）先端周辺に友部宿の集落が位置することになる。

山尾城跡の構造

先述したように、山尾城跡には現在十王中学校が建てられており、大半の遺構は消滅している。しかしながら昭和37年の校舎建設に先立ち実施した地形測量の成果と、現在周辺に遺っている遺構とを検討することで、山尾城は次のような構造をしていたものと推定される（市村孝男 1993）。

▲山尾城はⅠ～Ⅴの5つの曲輪からなる城郭であったこと。

○Ⅰ曲輪（校舎が建てられている部分）：一段高く築かれ、しかも巨大な土塁・櫓台をもっていたと考えられる。本丸に相当。

○Ⅱ曲輪（駐車場及びテニスコートとなっている部分）

○Ⅲ曲輪（グラウンドの大部分）

○Ⅳ曲輪（体育館から西側の畑にかけての部分）

○Ⅴ曲輪（グラウンド南側中央部分）

▲曲輪Ⅲと曲輪Ⅳ・Ⅴとの間は、カギの手に折り曲げてられて掘られた巨大な空堀によって分離され、曲輪Ⅳの南西には三本の堀切で尾根続きから分断され、敵の侵入を防いで

いる。(体育館と技術棟の間から西側を見ると、小屋があるが、この小屋は堀底にあたり、幅20m近くの巨大な横堀であったことがわかる。)

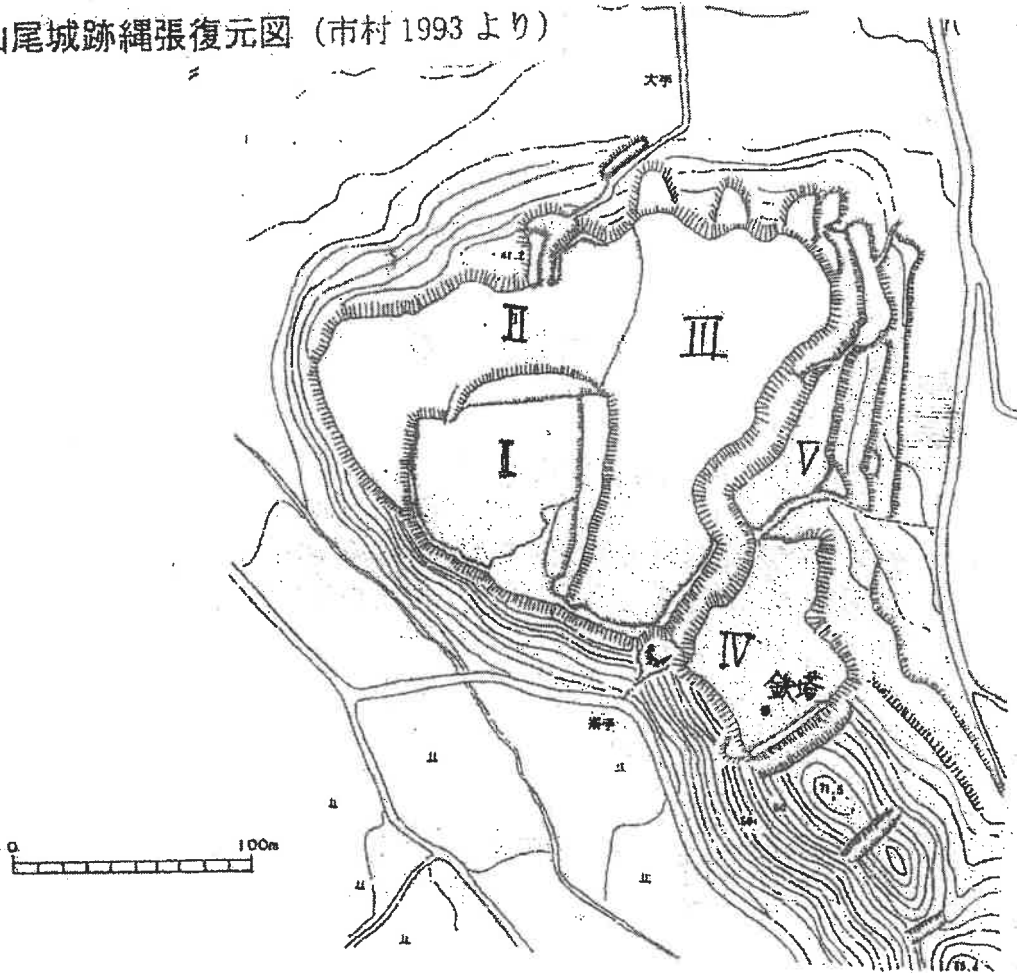
(巨大な横堀の東側の端は、バックネット裏の所から見るとわずかであるが、下方に残存している)

- ▲大手虎口は友部宿の方向から入ってきたところであり、坂道を登っていくと虎口に達する。土塁に取り囲まれた桁形状の固い防御の工夫が加えてあり、おそらくここには大きな城門が造られていたものと思われる。

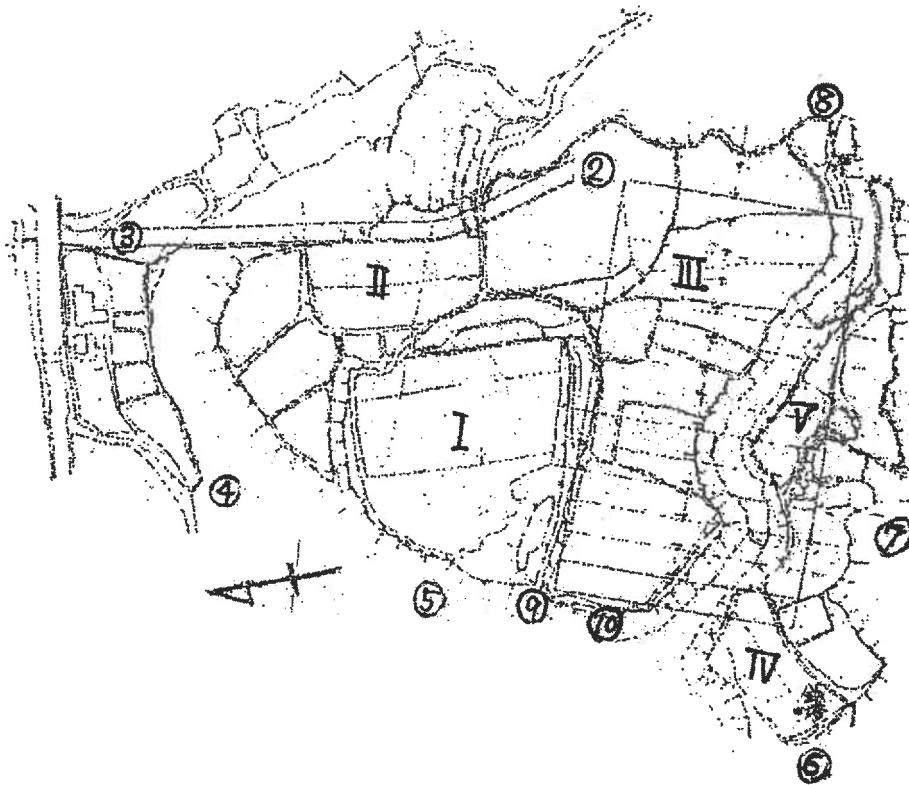
(追加：昭和37年十王中学校校舎建築前の山尾城地形測量図内の番号と追加事項の番号は一致している。)

- ①友部宿内を通る街道からの道筋は、城に近づくように西進し、一度左に折れすぐに右に折れる構造で屈曲している。その後、台地の裾部で再び右に折れ、坂道を登る。その途中で切岸加工がなされたと思われる小曲輪が左側にある。
- ②十王中の現在の門扉付近から東側のがけ下を見ると高さ5mほどの小山が見える。この小山の西側(城側)は堀になっている。この小山は土塁で、江戸時代の絵図にも載っている土塁の先端部にあたりと考えられ、この土塁の北の端は、現在、十王中北側正門付近にある土塁で、江戸時代中頃までは、つながっていたと推定される。
- ③現在の十王中正門(坂の登り口)付近で、右側(西側)を見ると自転車置き場に先には水田が見える。堀跡であったと思われる。さらに堀の北側は上石川に沿って土塁の存在が考えられる。(現在は民家になっているところが土塁で、県道に沿って宿場用の用水路と街道があったか。)
- ④城跡の北西側の上石川の内側(台地側)には、土塁が残っている。
- ⑤城跡の西側は、切岸加工が行われているような急ながけになっている。
- ⑥Ⅳ曲輪の西側の堀切は、よく残っている。
- ⑦Ⅳ・Ⅴ曲輪の南側には、腰曲輪が残っている。
- ⑧Ⅲ曲輪の東南側には、小曲輪が残っている。
- ⑨Ⅰ曲輪とⅢ曲輪の間に堀はあったと思われる。(西側の端に一部残存)
- ⑩Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ曲輪の北西側には土塁があり、北風等への対策になっていた。

山尾城跡縄張復元図 (市村 1993 より)



①



▲ 昭和 37 年十王中学校校舎建築前の山尾城跡
地形測量図

山尾城跡の時代背景

山尾城は、中世に友部を領した山尾小野崎氏の居城である。

小野崎氏は、平将門を討ち取ったことで知られる藤原秀郷の後裔という。秀郷流藤原氏は那珂川沿いに下野から常陸へ勢力を伸ばし、藤原通延が太田郷（常陸太田市）に土着したのは平安時代末期といわれている。その後、通盛のとき小野崎（常陸太田市瑞竜町）に移って館を構え、そこで初めて小野崎氏を名乗る。小野崎氏は、里川流域を中心に一族を配置し勢力を維持していたが、通盛の子・通長のときに佐竹氏に臣従することになる。以後、小野崎氏は独立性を保ちながらも、佐竹氏家臣として重要な地位を占めた。

小野崎氏が友部に移されたのは南北朝期、14世紀前半で、通胤のときという。しかし、通胤の子通春の代に、それまでの城（友部城）は水の便が悪かったため、新たに城を築いて移る。この新城が山尾城で、築城時期は14世紀後半のことと推定される。友部の地に小野崎氏が配置されたのは、北朝方であった佐竹氏が、常陸北部に勢力を張る南朝方の大塚氏やその背後の岩城氏に対抗し、佐竹領内の北辺を固めるためであったと考えられる。この後、小野崎氏嫡流（山尾・山直・山能・山野尾氏）は山尾城を本拠とし、日立地方にも一族（相賀小野崎氏・小幡小野崎氏など）を配しながら、室町・戦国期を通して当地方きっての国人領主として勢力を持ち続ける。また、久慈川下流域の石神（東海村石神）や額田（那珂市額田）などに分かれた一族は、宗家である山尾小野崎氏から独立した勢力を持ち、佐竹氏とも対立した動きをするに至る。

こうして、山尾城を拠点として常陸国北東部を押さえた小野崎氏であったが、戦国期末、成通の跡継ぎに男子がなく、佐竹氏から養嗣として義政（義昌）を迎えた。しかし天正13年（1585）11月、二本松（福島県二本松市）方面で伊達政宗との対陣中（人取橋の合戦）、義政は下僕に殺害されてしまい小野崎氏は断絶する。その後、東義久の子・宣政が跡を継ぐが、山尾小野崎氏は以前の隆盛を見ることはなく、山尾城は佐竹氏が直接管轄することになる。慶長7年（1602）、関ヶ原の戦いの戦後処理として佐竹氏は秋田に移され、それにともなって山尾城は廃城となった。